

1 研究主題

学習や生活の場面で活用できる！生きて働く力を育む授業づくり
～学習の基盤となる資質・能力を育てる～

2 研究主題設定の理由

(1) 主題の捉え

【生きて働く力とは】

児童生徒が学習したこと、経験したことが学びとして定着し、他の学習場面で活用したり、自分の課題等を見つけてさらに学ぼうとしたりする力のこと。また、「深い学び」の姿と定義されているように、知識・技能が相互に関連付けられ、構造化されたり身体化されたりして高度化し、適正な態度や汎用的な能力、概念的な知識となって、自由自在に使いこなせるように“駆動”する状態に向かっていく力のこと（『深い学び』田村学）。

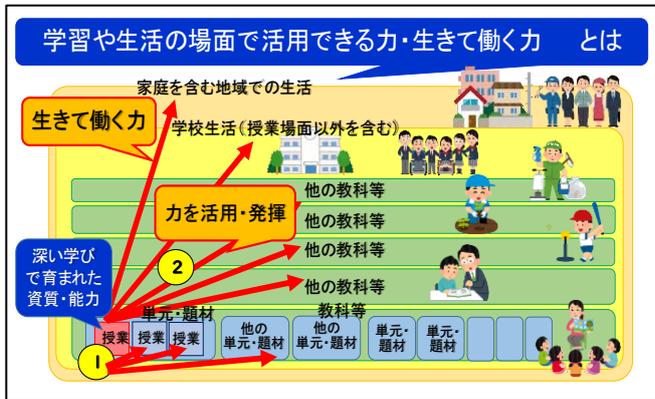
学習指導要領では「生きる力」を児童生徒に育むことを目指して、教育活動の充実を図ることを示している。学校における学びは、社会における生活、社会人としてのあるべき姿とつながっている。今の指導が児童生徒の将来の力へつながっていることを、我々教員はより意識して授業づくりをしていかなければならない。

本研究は、児童生徒が将来社会に参加して豊かな生活を生きていくために、学校での学びが生きて働く力になるよう、教科等横断的な視点に立った授業づくりについて3年計画で実践を通して考察する。

令和4年度は「教科等横断的な視点を踏まえて」を副題として、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育てる授業づくりとはどのようなものか理解を進めてきた。今年度は副題を「学習の基盤となる力を育てる」として、1年次の研究成果を生かし、教科等横断的な視点での授業づくりの充実に向けて取り組んでいきたい。

(2) 1年次の校内研究より

【教科等横断的な視点で授業づくりを行うことの理解と実践】



(図1)

将来に生きて働く力というものは、1つの教科や1つの単元、1つの授業のみで育成されるはずがなく、各教科で学んだ力が総合的に働くようになることが理想とされる。そこで、教科等横断的な視点が大切になる。

1つの単元のまとまりを通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現させ、教科の力を育成する(図1、矢印①)。また、その育まれた資質・能力を、他の教科等でも活用・発揮してさらに

高めていく(同矢印②)。このように、ある学びを他の教科等の学習場面や生活場面へ広げていくことで、学びが深まり、資質・能力が確実に身に付いていく。そして生きて働く力へつながっていくと考えた。

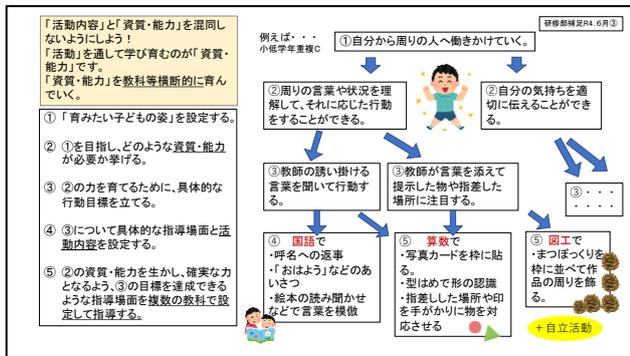
【教科等横断的な視点に立った資質・能力とは】

育成を目指す資質・能力の例について、学習指導要領解説総則編において以下のように記されている。

- ①例えば国語力、数学力などのように、伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる力としてのあり方について論じているもの。
- ②例えば言語能力や情報活用能力などのように、教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される力について論じているもの。
- ③例えば安全で安心な社会づくりのために必要な力や、自然環境の有限性の中で持続可能な社会をつくるための力などのように、今後の社会の在り方を踏まえて、子供たちが現代的な諸課題に対応できるようにするために必要な力の在り方について論じているもの。(数字、下線 研修部)

1年次の研究では①部分を手がかりにして教科等横断的な視点での授業づくりの理解を進めていくこととした。また前年度までの校内研究「深い学びの実現を目指す授業づくり」の成果を生かしながら教科の力を育成しつつ、さらに①下線部に関して追記されている「教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指したりすること」を中心として取り組んだ。

【グループ研究実践～育成したい資質・能力を目指して～】



(図2)

小・中・高の学部からさらに小グループに分かれての研究実践では、対象児童生徒または対象学級において、まず「どのような資質・能力を目指していくのか」を明確に設定した。そしてどの教科等の授業で「身に付けた力を活用・発揮させて学びを確かなものにし」「目指す資質・能力へ向かっていくか」を、研修部から提案したシート(図2)を活用しながら整理し、検討していった。

ここで改めて意識しなければならないことは、身に付けたい資質・能力を目指して教科や単元等を横断して授業を組み立てていく際、活動内容(コンテンツ)をつなげるだけではなく、資質・能力(コンピテンシー)をつなげていくことを忘れてはならないということである。

これまでの知識重視の教育から転換し、教師が何を教えるかということから、児童生徒が何ができるようになるかということへ考えを改めなくてはならない。それは知的障がいの児童生徒の教育にとっても同じことが言える。各教科の目標を達成させることと別に、各教科を分断して指導するだけではなく、うまくつないでいくことで、各教科で学んできた力が総合的に働き、生きる力につながっていく。

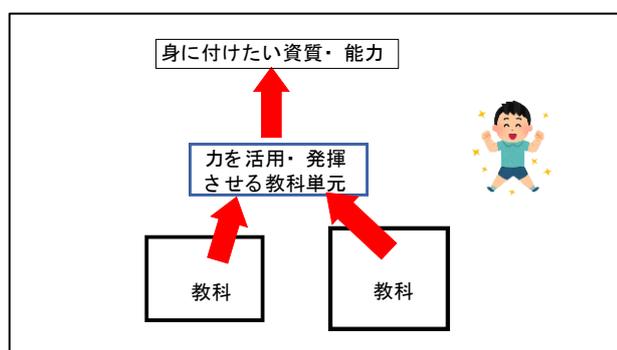
グループで設定した目指す資質・能力は、例えば「身近な人に自分からかかわる力(小学部重複低学年グループ)」「言葉や身振りで想いを伝える力(小学部重複中学年グループ)」「相手の気持ちを考えられる力(中学部通常グループ)」など、自分の想いを伝えるための言葉の力や人との関係づくりにおいて自分

からかかわろうとする力を設定し、その力を育むために児童生徒が思考する場面を大切にしたい実践があった。また、「言葉で伝える力（高等部2グループ）」を設定し、主に作業学習の授業で身に付けた力を活用・発揮させていくことで、生徒の力を確かなものにしていくという実践があった。

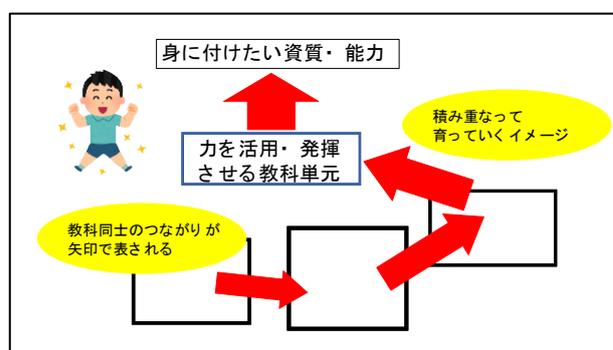
各グループで1事例を立てて授業と省察を積み重ね、学んだ力を他の学習や生活場面で活用・発揮させて資質・能力を育成させていく「教科等横断的な視点に立った授業づくり」が徐々に形になり、成果を見せ始めていった。

【教科等横断的な視点を踏まえ、教科と教科の関連を年間指導計画一覧表で表す】

教科等横断的な視点に立ちどの教科単元をつなげて資質・能力を育成していくかという考えを、組織的に計画するものとして表す必要がある。本校で以前から作成している年間指導計画一覧表を活用し、グループごとにそのつながりを矢印で表そうとした。



(図3)



(図4)

およそ2つのパターンに大別された。それぞれの教科で力を身に付けて、1つの教科単元の場面に矢印を集め、そこでそれらの力を活用・発揮させて力を高めようとする表し方(図3)。1つの教科単元で身に付けた力をその次の教科や単元で活用・発揮させていくことを繰り返す、力を積み重ねるように育てていくという表し方(図4)。また、どの資質・能力を育成する矢印であるのか書き加えるなど工夫がなされ、各グループの考えが表現されるものとなった。

【成果と課題】

実践を通して「教科等横断的な視点」への理解が進んできた。視点の一つとして「目指す資質・能力を明確にした授業づくり」が挙げられるが、それが各教科の目標も改めておさえることになり、1つの教科の学びが1年間の授業計画の中でどのような位置にあり、他教科の学びとどのように関連しているか、俯瞰して見つめ直すことができた。

実際に様々な場面において身に付けた力を生かそうとした指導によって、教員が教科等横断的な視点について意識をもつようになり、児童生徒に何が身に付いたかや何ができるようになったかが明確になってきた。また、結果としてわかりやすい指導にもなり、児童生徒自身が成長する実感をもてるものになったことも報告された。教科等を相互に関連づけることの効果に気づくことができ、多くの教員にとって「教科等横断的な視点での授業づくりに取り組む良さ」を感じられる実践となった。

「教科等横断的な視点を持ってねらいを具体化する」とは、学校生活において児童生徒にどのような力を育んでいくのか考えることであり、「他の教科等における指導との関連付けを図りながら」とは、学習

したことや経験したことを積極的に様々な場面で活用させることでより確かな力に育んでいくことであると考えるに至った。

一方で、さらに研究を進めていきたい点も挙げられた。以下については2年次の校内研究において取り上げていきたい。

○育成したい資質・能力を目指して教科等横断的な視点で授業づくりをする考え方について、実践を通してさらに理解を深めていくこと。特に各教科等を合わせた指導では、その授業で行う教科の観点をもってねらいを設定することや、さらに他の教科等にどのように関連させていくのかをより整理していく必要がある。また担任と授業担当者同士の連携が重要であることは言うまでもないが、相互の授業の関連に有効性を見出すことができれば、児童生徒の社会参加や自立につながる一歩となる。1年次の取り組みを基盤としてさらに授業づくりの充実を目指していきたい。

○授業づくりの教科等横断的な流れを表す工夫について、継続して実施すること。活動内容（コンテンツ）をつなげるだけにとどまらず、育成したい資質・能力（コンピテンシー）で考えることを、年間指導計画一覧表を活用して継続し検討していく。年間指導計画一覧表を用いた教科等の関連表記に関しては、学級ごとに作成を促し、学級経営に役立てられるようにしていきたい。

○評価の仕方について、より明確にしていくこと。目指す資質・能力に向けてねらうように育まれているか、授業でどのような姿があれば力が身に付いたと言えるか、適切な評価の方法について評価規準等を設定することも含めて検討したい。

○自立活動の指導と教科指導の関連について計画・実施すること。授業づくりにおいて、「自立活動の指導を教科指導と密接な関連を図って計画・実施すること」をより深く考えていきたい。障がいのある児童生徒の場合は、その障がいによって、日常生活や学習場面において様々なつまずきや困難が生じることから、小・中学校等の幼児児童生徒と同じように心身の発達の段階等を考慮して教育するだけでは十分とは言えない。そこで、個々の障がいによる学習上または生活上の困難を改善・克服するための自立活動の指導が必要となり、それが各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っている。自立活動と教科の指導の関連について、具体的な授業実践を進めていく必要がある。

(3) 2年次の研究内容について・研究仮説

教科等横断的な視点に立った授業づくりは、育成したい資質・能力を目指し、様々な教科等の場面で力が確かなものとなるよう育んでいくことができるようになった。教科等横断的な視点に立った授業づくりについての良さを理解した1年次の成果を生かし、2年次では児童生徒の日々の学習や生涯にわたる「学びの基盤となる資質・能力」に着目して取り組んでいく。

学習の基盤となる資質・能力とは、学習指導要領で挙げられている言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の3つとする。

1年次のグループ実践では言語能力の向上に関する資質・能力を設定する事例が多かった。別テーマを設定していたグループでも、言語能力の役割が重要であるとする事例もあった。教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される言語能力については、引き続き高い関心が寄せられるだろう。

また令和4年度にほぼ全ての教室にテレビモニターが設置された他、小・中学部の児童生徒全員にタブレット端末が配当され、高等部生徒もタブレット端末を活用した学習環境が整ってきていることか

ら、各教科の特質に応じて効果的な ICT 活用についての授業実践も増えてきている。本校においても今後情報活用能力の向上は一層求められていくと予想される。

問題発見・解決能力とは、物事の中から問題を見出し、解決に向けて予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく力を指し、それぞれの教科で深い学びの実現を図ることを通じて身に付けられるようにしていくものである。生涯にわたって主体的に学ぼうとする力に直結するものと考ええる。

この3つはそれぞれが独立して育成されるものではなく、例えば情報活用能力の育成を目指して指導するなかで、併せて必要な言語能力の向上も期待できるだろう。教科の特質に応じた見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現させていく単元構成で、問題発見・解決能力の育成につながる場面もあろう。担当する児童生徒または学級に対し主にどの資質・能力を目指して指導していくのか1つを設定するが、関わりのある教員が連携して具体的な授業づくりへと展開させていくなかで、総合的に他の資質・能力も向上していくこともあり得る。そうして培った学習の基盤となる資質・能力は、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を目指すことにつながり、児童生徒の「生きて働く力」を支えていくものになると考える。

3 研究目標

- (1) 「生きて働く力」につながる、「教科等横断的な視点に立った資質・能力」を育成するための指導方法について3年計画で研究を進め、年次ごとに成果や課題を明らかにする。
2年次は「学習の基盤となる資質・能力」に着目して研究する。
3年次は1・2年次の成果を生かし、「現代的な諸課題に対応していくための資質・能力」を含め「大笹生支援学校で育みたい資質・能力」について取り組み、自立と社会参加に向けた資質・能力の育成を考えていくこととする。
- (2) (2年次) 学習の基盤となる資質・能力を、児童生徒の障がいの状態や特性及び発達の段階等を考慮し、それぞれの教科等の役割を明確にして関連を図りながら、年間指導計画一覧表を活用して授業づくりを計画・実施し、教科等横断的な視点で育んでいくことができる。
- (3) 授業づくりを含めた校内研究の推進を通して、教職員の指導力と専門性の向上を図る。

4 研究方法及び内容

- (1) 主な研究組織は小学部・中学部・高等部とし、各部でさらに小グループを組織し、研究テーマに基づいた授業実践を通して校内研究を進める。
- (2) 学習の基盤となる資質・能力の育成を目指し、各教科の特質に応じた指導方法等を検討し授業を実践するとともに、目指す資質・能力が確かに育成されているか評価していく取り組みを通して、生きて働く力へ近づくことができたかグループで考察する。授業づくり計画書の様式を用いて実践をまとめ、また教科間の関連について年間指導計画一覧表に表す。
- (3) 各グループにおいて授業研究(年間指導計画一覧表の活用、単元・題材計画の作成、授業のビデオ視聴による協議等)を実施し、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成について理解を深めるとともに、学び得た知識を各自の授業実践に生かす。
- (4) グループ内外での授業参観や学習会、公開研究会等で実践を発表する場を設け、教員が互いに学び

合う機会を設定する。

- (5) 5月と2月の全体研究会において、年度ごとに校内研究の進め方等について教員に共通理解を図り、各研究グループのまとめや成果と課題を共有することで、次年度の研究へつなげる。
- (6) 年度ごとに実践事例集を作成し、教科等横断的な視点での授業づくりについてそれぞれの実践を本校の取り組みのデータとして蓄積し、広く活用できるようにする。
- (7) (研究テーマに関わる教育講演会) 令和5年度は、6月1日(木)に元筑波大学附属特別支援学校長 下山直人氏、12月8日(金)公開研究会において東京都立久我山青光学園統括校長 丹野哲也氏を講師に迎え、講話いただくとともに、本校の研究について助言をいただく機会とする。

5 年次計画 (案)

生きて働く力の育成

R4 1年次 ～教科等横断的な視点を踏まえて～

- (1) 教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりとは 理解と実践
 - 育成を目指す資質・能力の明確化
 - 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と教科等における資質・能力の育成
 - 身に付けた資質・能力を他の学習や生活で活用する場面の設定
- (2) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化

R5 2年次 ～学習の基盤となる資質・能力を育てる～

- (1) 教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりの充実
 - 育成したい学習の基盤となる資質・能力について具体化し、関連する授業での実践
 - 資質・能力を活用・発揮させ、確かなものに育成されているか評価方法の検討 など
- (2) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化
- (3) 自立活動の指導と教科指導との関連にかかわる実践

R6 3年次 ～大笹生支援学校で育てたい子ども像に向かって(仮)～

- (1) 1・2年次の成果を生かし、本校の教育目標から「大笹生支援学校で育てたい資質・能力」について教科等横断的な視点に立った授業づくりの充実
- (2) 現代的な諸課題に対応していくための資質・能力
 - 豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた力の育成
- (3) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化